

寺子屋方丈舎は、学校外の子どもの学びの場所として1999年に設立したフリースクールです。現在、7歳から21歳までの若者を受け入れています。

子どもを受け止める親のために (11)

特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎 鈴木 篤

「子どもが『行きたくない』と話したら」

「学校に行きたくない」

子どもがそう言った時、保護者の皆さんはどのように反応をされるでしょうか。「行きなさい」と諭す方もいれば、どうにかして子どもを登校させる場合もあるかもしれません。また、理由を追求するものもあるでしょう。

保護者からすれば、自分の子どもが日常のルーティーンから外れた際の対応は「分からない」と言うのが正直なところで、納得できる理由が欲しくなることかと思えます。また、「学校に行かない」と子どもの進路や将来に関わってしまつ」と不安なお気持ちになるのも当然のことです。

ですが、その「行きたくない」は、子どもが自分に差し掛かる危機から自分を守ろうとして取っている行動であるか



「保護者が子どもにどうしてほしいか」ではなく「子どもの身体と心を守る」と「ではないでしょうか。」「子どもを守りたい」を中心に据えた、保護者が取りうる対応は、以下のように考えられます。①無理な登校を促さない②細かい追求をしない③休むことに条件付けをしない④登校の判断を子どもに任せて待つ
こうして、「子どもが自分で考える時間と場所をつくる」ことが必要とされます。

課題解決ではなく、その時の最適を

保護者の方の多くは、子どもに寄り添いたいという気持ちで子どもに接していることと思います。しかし、保護者

もしもありません。親と子では学生時代を過ごしている時代が異なり、重ねてきた経験も異なります。よって、学校での体験が保護者からすると些細なことと感じられても、子どもにとってはどうしても辛いことである可能性があります。子どもは、その辛い状況から自分自身を守るための防衛策として、その場から自分を遠ざける行動を選択するのです。

「行きたくない」が判断の中心

子どもの学校での経験やそこで感じる気持ちは、保護者の立場からすると、理解に努めてもなかなか明るみ出ない領域です。分からないこそ保護者は理由を知りたくなるし、保護者自身が考える「正しさ」や「どうしてほしい」の基準で子ども側に対応を求めてしまいます。「行きたくない」という理由は子どもによって様々で、一日整理すればまた学校に足が向く場合もあれば、そ

自身も個別の関心を持つ人間であり、それまでの人生で培われた経験や常識「正しさ」をお持ちのほうです。子どもの不登校を「課題」として捉え、解決に導こうと考えるとき、どうしても保護者の「正しさ」や「関心」をもとにして判断を下してしまうこととなります。しかし、保護者が子どもの行動を規定することは、子どもが家庭に居場所を失つてしまつ、ひいては保護者の不登校についての悩みを深めてしまつことにつながります。

だからこそ、大人としての常識や正しさを一度横に置いてみてはいかがでしょうか。そして、子どもとの対話を通して、その時の子どもにとっての「最適」な状況を探すことを意識してみてもいかがでしょうか。解決を目指すのではなく、その瞬間の子どもが守られるための最適を探ること

で、子ども
の辛さも、
保護者の
心配も、ほ
ぐれていく
のだと思っ
ます。

「子どもをどう受け止めれば良い？」
「なんて言葉をかけてあげれば良い？」
私たちは、不登校に悩む親子のお話を受け止め
解決のお手伝いをします。



特定非営利活動法人
寺子屋方丈舎
公式LINEアカウント

会津若松市大町1丁目1-57 TEL 0242-93-7950 毎週火-土曜日 10:00-19:00